●教授会を追放せよ！
●斗う学園を奪還せよ！
●全国学園斗争勝利！
●70年安保粉砕！
●全ての斗かう労働者学生は全共闘に結集せよ！

バリケード

4月22日（火曜）
第6号（1部20円）
京都府立医大全学共闘会議
情宣局発行

4.26—28斗争を全力で斗い抜き 5.1安保メーデーに結集せよ！

4.28 中央権力斗争へ 総結起せよ！

「地獄は　てめえの足もとにもあるのに　彼岸の地獄ばかり見ようとするんだ。彼岸　つまり　第三世界とかね。」
悲惨さを売り物にし、憐れみをこう時はとっくに終った。てめえの足もとの地獄のありさまをとっくりと見るがいい。とにかく、はっきりしていることは、泣いても叫んでもおてんとさまに、顔向け出来るようなまっとうな生き方が始まるのは、その地獄の中をはいずり回るこれくらいのなら知らないけど、ハスのうてなの上でニコニコしているお釈迦様など、糞食えだ。

1969年、我々は、個別府立医大斗争に於て、東大の一年を二カ月足らずの間に一挙的に圧縮した状況を眼前に見ている。半ば、ほう然と、それでも必死に抵抗しつつ……。しかし、その恐怖と不安の底から再度我々の斗争の方向性を探りあてねばならない。

全国の学園斗争は、一方では膨大な犠牲者を出しつつも、学園奪還―全学バリケードストという形態に象徴される執ような抵抗の段階から更に、その個別実体を規定する全階級情勢へ肉迫する斗争へと発展しつつある。個別的域を脱出した全人民的斗争即ち政治斗争の地点から、再度自らの斗いを把えかえし、その中で、70年安保斗争を自らの主体の問題として担わなければならない。

1 日常の権力再編の進行

日常の動向を述べる前に、国際的階級危機の煮つまり状況を明らかにする必要があるが、バリケードNo.5に、詳しいので紙面の都合上省略し、沖縄を中心とする70年安保へのブルジョアジーの動向を述べよう。

まず、

① 現在、東南アジアへの侵略を基礎としつつ、労働力不足を根底に秘めながらも、独占体制の強化に結びついた過剰資本の累積が高まり、その結果、米国に対抗した資本輸出とその勢力圏確保を要請されている日本は、（少くとも東南アジアに於ける）日米関係のヘゲモニーを奪いつつ、アジアの盟主を狙い、ついで

② アジアに於ける中進国（パキスタン、インド等）危機の進行は、日帝の存在基盤＝アジア市場階層の分解と流転は、昨10・21斗討例→プロレタリア独裁」を前面に押し出した大衆の実力斗争部隊への結集を実現しつつある。国民統合のイデオロギー的軸を定立しなければならない。しかもそれが、「学生」運動から、堰水港工場バリケード占拠斗争に見られるように、労働者階級の中に還流しつつあることを把握できる。このような全共斗―労働者共斗会議が保有している潜在的な大衆的結集の下の1の思考は、具体的な権力問題への接近を幻想としてのコミューンソヴィエトから実体としてのそれへと大衆が、摸索し始めたことを示しているることを、我々は確認

統一戦線結成に向けて

3月31日、蜷川=教授会権力は府立医大の医療合理化と斗かう医師の抹殺のために、無給医、青医連の大量首切りを決行しようとしたその日、我々も又明確に自己を乗り越えた。我々が全くの無権利状態におかれた医療労働者である故に、我々が勝利し得る道が同じ様に抑圧と搾取と疎外の下におかれた病院内労働者との固い統一戦線を創出しなければならなかったのだ。その任務を負ってオルグ団が組織された。オルグ団は31日府庁デモの後、全ての病棟詰所で権力の介入を許さず看護労働者の連帯斗争を徹夜で呼びかける仲で、我々はロックアウトを延期させる所まで斗かい取ったのである。

四月一日オルグ団は次の位置付けと任務を持って恒常的活動を行う事を意志統一したので詳述しておく。

●青医連運動を医療労働運動として斗かい抜くために！

青医連はインター斗争の中から誕生した。イ斗争は60年安保の前後に〈病院スト〉が看護労働者を中心に斗かわれた際、医師が〈白衣の暴力団〉として斗争確認を行った事に対する否定的総括の中から、そして安保の社保拡充政策が打ち出される中でイ制度の矛盾が深化する状況の現出の中から起って来た。一方イ斗争を支える運動理論を医ゼミの中で社会保障論の探求と医師の職業的実践の統一の方向の探求として求めて行った。

我々は社保の本質規定を資本による搾取の変容型態として把握、一方、自己の医療労働〈職業的実践〉の矛盾を自ら止揚して行く斗争が、医局との斗かいへと発展していく中で医ゼミで構築して来た理論は青年医師運動として、青年医師連合の結成として実践されていった。

青医連は、自己の研修問題に出発しながらも、研修が医療労働を通して行われる事を、〝医療労働〟する過程で認識し、その医療運動が提起している主要な内容の一つであります。我々の場合については、医療の商品化営利化が進行する中で医療労働を行う事は患者との関係で加害者性を負わされており、又、研究が製薬資本の下請けとなって行われる際には製薬資本の営利のために研究者が利用されているばかりか人民に対する加害者である事を意味している。

我々は全共斗運動の中で提起されて来たこの様な加害者性の自己否定を医療労働者として又研究労働者として院内統一戦線を形成する中で物質化させていかねばならない。

●全共斗運動の物質化のために！

青医連運動を先進的に斗かって来た東大医学部の斗かいが、5・15安田講堂封鎖で全学化する中で理工系学生、院生、助手達は〝第二第三の青医連を〟と運動の普遍的質を継承して行った。

その内容は自らの研究労働が資本制下では人民と対立せざるを得ない加害者性を持ち、それ故にその自己否定を通して自己を普遍的立場へと位置付けねばならないとするものであり、それは全国全共斗運動が提起している主要な内容の一つであります。我々の場合については、医療の商品化営利化が進行する中で医療労働を行う事は患者との関係で加害者性を負わされており、又、研究が製薬資本の下請けとなって行われる際には製薬資本の営利のために研究者が利用されているばかりか人民に対する加害者である事を意味している。

我々は全共斗運動の中で提起されて来たこの様な加害者性の自己否定を医療労働者として又研究労働者として院内統一戦線を形成する中で物質化させていかねばならない。

●オルグ団の具体的任務！

――院内統一戦線形成から病院ゼネストへ――

オルグ団は青医連運動全共斗運動が提起した以上の問題を先進的に実践し普遍化する部隊である。

オルグ団は府立医大斗争の質的飛躍を切り拓くために、院内統一戦線の形成から病院ゼネストと向け活動を開始している。

それは、学生、青医連、無給医、助手等の個別利害をかかげた要求斗争を、学生＝労働者の連帯斗争へと高め、医大斗争を真に勝利させ、70年安保斗争を斗かい抜く医療ソビエト形成への第一歩を意味するだろう。

オルグ団はこの様な展望をめざすべく、当面府立医大斗争〈斗争項目と我々の斗争経過等〉の真実の姿を看労働者を中心に全ての労働者に示し、理解を求めていきたい。この事は府職労執行部が、自らの党派利害を守るための唯一の方法として我々全共斗の斗かいにヒボウ中傷の限りを尽し、組合員に真実を提示していない現状、火急を要するものである。我々は我々の内容と事実経過を述べる中で、明確に日共民青の斗争破壊路線の犯罪を十二分に暴露し、真に搾取と抑圧と疎外からの解放をめざす斗争の方向性と統一戦線の内容を示していく事が出来るしなさねばならない。

又、オルグ団は理論武装を深化させる中で、日共社民の既成左翼をのり越えた運動論を戦後労働運動、医療労働、看護労働の根底的把握を行っていかねばならない。

以上、オルグ団は、看護、臨連等先進的労働者と固く連帯し、斗争勝利に向け斗かい抜く事を表明します。

戦線の階級的深化を獲ち取れ

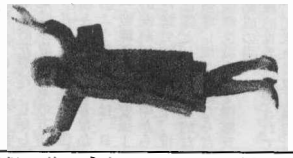
中間総括

〈現時点における統一戦線の問題性〉

われわれは今、きびしい弾圧の下でこの斗争の先鋭性を把握し、医療労働者との共斗を模索しつつ分せまり得ない状況にある。ではなぜ欠落しているものは何なのか。

我々は学内から追追放され、無媒介的にではあるが院内へと侵出して行った。それは、客観的には個別学園斗争から飛躍し、学生と労働者の統一戦線の問題に発展している。

現在の段階でその共斗を可能にしているものは、政治権力の露骨なバクロに触発された反権力意識一致、即ち学生と医療労働者間の要求項目・スローガンが疑列的な状況にあり全体としての個別経済斗争の方向性がいまだ不確定である。この亀裂が、現在われわれ内部に於いて直感的に革命を意識すると同時に、斗争に対する一般的不安を引きおこすと共に、全共斗からその現在的な総括を行なう事を要請し始め、全共斗運動に新たな質を付与しつつある。



喫茶　キャロン
京都府立病院前
(211)　1710

喫茶　梓
烏丸四条下ル東側
(351)　7716

〈無給医会は自己の階級意識を明瞭に深化せよ〉

無給医ストの必然性は数限りなくあるが、なかでも赤裸々な労働収奪と労働力商品収奪機構としての医療の位置が、その矛盾の根幹をなしている。そして、教育イデオロギー・医療のヒューマニズム・聖職といった幻想のヴェールによって、その全てが隠蔽されて来たが、「イデオロギーの終焉」という言葉にも象徴されるように、今や次々とその欺瞞が暴露されつつある。イデオロギーによる国民の統括ができなくなった政府ブルジョアジーは、上からの権力再編として、医師層に対しても階層分断管理機構の整備を押し進めている。

このような状況が感覚的に、底辺に存在するがゆえに鋭敏に把握していた無給医層が、全国学園斗争・階級斗争の高揚に触発されて偶然にストへ突入したというのが正確な把握であろう。

したがって、斗争の質からみれば、我々の斗争とは全く別個のもの、つまりそれぞれの個別斗争であった。ただ、その形態（スト）が与える幻想によって、一緒にやっているという心強さがあったにすぎない。さらに言えることは、学生にとって無給医ストはたいした意味を持っていなかった、ただ教授会に対する圧力になればよいというだけのものではなかったのか。それは60年代病院ストの神話化を打倒できなかった我々のあまさ（今になってはじめて病院ストに固まって追いつめられている。）のあらわれであったろう。

つまり、学園斗争の位置付けが、改良斗争の域を脱していなかったと総括しなければならないのである。

ところが、機動隊による弾圧下で政治・権力の全面バクロがなされるや、府立医大斗争の位置があらためて認識され、労・学反帝統一戦線の必要性が深刻にかつ全体的に意識されている。しかし、その内容はまだ充分な論理的検証を経ておらず、自然発生性に基づく直観的洞察が大きな比重を占めている。

したがって、現在までの共斗は反権力意識に支えられた過渡的なものであり、そのままではすぐにその限界性を露呈するであろう。

無給医ストは、戦術のエスカレーションは行なったけれども、何らかの新らしい状況を切り開いてはいないし、問題提起もなし得ていない。しかし、これまでのあいまいな労・学統一戦線のなかから深めるために臨床連合闘争委員会が医療労働者の先進的部分として登場し始め、全共斗運動に新たな質を付与しつつある。

〈全幻想領域の全面的否定から、革命的実践へ！〉

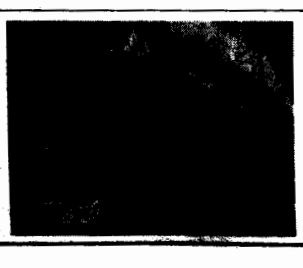
全共斗運動の発生過程は、一般的な民主主義（全員加盟制自治会etc）を含定し、それをのりこえるべきものとして登場した。すなわち、一人一票多数決の原理をあたかも永遠の真理のごとくに錯覚し、ブルジョア議会政治を擁護するだけのものになりさがった戦後民主主義への挑戦である。第二次大戦下に於いて、戦争反対をとなえながらも加担者になって行くという二律背反的な生き方をし、戦後GHQに守られるなかでブルジョアジーは、上からの権力再編として行ったものへの告発でもある。

今、いわゆる左翼の間であるいは自民党すらも「参加」という言葉を使用しているが、その言葉が仏五月革命を圧殺して行ったドゴールの言葉であることを考えるならば、いかに現代民主主義が空疎なものであるかがわかるであろう。言葉の限界を知ったものが、そして思想の自由といわれるなかで階級性が隠蔽されて行く現実を知ったものが、言葉を自己の主体性へのパトスの注入として、その存在を行動へと投企して行ったのである。思想の侮蔑ではない。数多い評論家を否定し、変革への行動をささえるものが何によって可能なのか明らかであろう。

その全共斗運動は、今やいわゆるインテリゲンチャあるいは既成左翼集団の知的究廃ぶりを暴露するなかで全国に普遍化しつつある。

そしていま府立医大斗争のなかで、市民主義的団結（名前はいいが実は体制側から与えられた支配形態である。）に基づく無給医会、助手会のなかから斗う部隊（模索的ではあるが）として、まさしく全共斗運動の発生と同じような質をもって臨床連絡会議が登場した。この新しい部隊は決して第二の助手副手会になってはいけないし、自己の思想と行動を明確にしない、全共斗運動の一翼になるものとして再編されなければならないのである。

喫茶　グリル　AM 10.00 ～ 深夜 2.00
サービス タイム　AM 10.00 ～ 12.00
皐月
京・河原町荒神口東入　TEL (221) 6030


想像力が権力を奪う
さまざまな青春が語りだす　あなたの書斉
京都書院
中京区四条河原町上ル　TEL (221) 1062 (代)

Imomushi の叫び

全面的な価値体系　の転換が叫ばれる。必要とされる。
それ以上でもないしそれ以下でもない。
何なのだ。この苦しみは、
このすさまじい悶々たる重みこそ君のものだ。

君よ。
今　何が必要であり何が問われているのか　胸にズシリと重く。
人が何人死んだからとは言わない。
虫けらみたいに死ぬがよい。虫けらなんて糞食らえ。
虫けらは　虫けらしい死に方がある。
それ以上の悲しみなんてあるものか。

よし。
行くがよい。
今、俺の体内に宿る虫けらの。
いも虫の如く　つぶされても
つぶされても
葉っぱを食べ続ける虫けらの。
魂こそ。

春。
去るがよい
今　虫けらのつぶされた後の虫汁を。
のみこめないなら
去るがよい。

恋人。
来い。
虫けらの苦しみを共に
分かちあえなんて
決して言わない。
虫汁を。
一緒に。
苦虫を。

飲もうなんて　一言も言わない。
唯　ドロドロした情念の
かたまりを　ぶつけるのだ。

――Po chi――